

会議録

件名	第7回 軽井沢未来構想会議
日時	平成25年12月24日（月） 11:00～13:00
場所	茜屋珈琲店 駅前店

事務局 (udc) :

皆さんお揃いですので、これから第7回未来構想会議を始めさせていただきます。朝早くからお集まりいただき有難うございます。本日は会議次第の通り進めさせていただきますが、本日は委員長から総括プレゼンテーションを頂きまして、作業班からは中間報告をさせていただきます。簡単なお食事をしながらのワーキングランチとさせて頂いて、1時を目途に終わりたいと思っています。宜しく願いいたします。ここからは委員長にお渡ししたいと思っております。

中村委員長:挨拶

皆さんおはようございます。今日は事務局のお計らいで早めに設定になっています。早い時間から有難うございました。皆様からのプレゼンテーションを頂きましたので、順番として私が総括をする番となっておりますが、総括する程、整理が出来ておりませんが、3月のまとめに向けて雑駁ではありますが、お話をさせて頂きたいと思っております。それに対してご意見を頂ければと思っております。皆様の発表は理解してメモにも目を通してありますが、何分にもそれぞれ委員の皆様が力いっぱい書いて下さったので、全ての先生方の意見を盛り込む事は出来ておりません。勿論、報告書には細かく記載する事になります。その中で、要約する事が私の役目だと思っております。全意見を反映できておりませんが、私から見て最も重要なメッセージと思われるものは取り入れたつもりであります。抜けている部分は、ご意見を頂ければと思っております。

委員長による総括プレゼンテーション : 中村良夫委員長

早速ですが、お話を申し上げようと思っております。

お手元に「軽井沢構想会議 基本思想と原則（中村 試案未定稿）」という資料を用意しました。もう一つは作業班の方で書いていただいたA3資料がございます。この1頁の資料をご覧ください。3段に分かれているうちの真ん中の帯ですが、一番左側に、軽井沢の全体を考える際の一種の基本的なスタンス、右側に、軽井沢風土自治圏五原則、その右側に原則の方法的思想的特徴を記載しています。私が主に申し上げたい事の目次的なものになります。要するに、どういう問題提起をするのかから入り、基本的な着眼点をどうするのかという問題をお話する事になろうかと思っております。私自身のメモに従ってお話し申し上げます。



成功裡に終わってきた都市で、なお挫折しないで前を見ようとする街は、どの街も 100 年後をどうしたら良いか考えています。この様な街は決して少なくなく、世界中にあります。パリのグランプロジェも有名で 30 年前からルーブル美術館を改修したり等、様々な事をやっています。その過程で物議をかもししている事はありますが、一定のインパクトを与えています。ただ、パリの場合は、大都市であって、むしろ、私が注目する事は、世界の中でローカルな都市が非常に重要な発信をしている事です。ダボス等はその一つになります。ドイツのフライブルグは環境関係の都市として、排気ガス問題等に対してラジカルな負荷をかけて実行しており、世界的に有名になっています。もう一つは、イタリアの農村からの新しい発信です。例えばスロー風土運動等はトスカーナ等の地方の小さな都市、農村が原点になっていると思います。最近では、NHK かどこかの局でイタリアの小さな村の物語というタイトルで連続放映がされていました。皆も非常に注目している事だと思います。いずれも、共通している事は小さな街から発信されている事です。それから、街を含む近代的な国家という制度にはあまり関係がない事です。これは非常に重要な事で、小さな志のある地方都市が今後の地球全体、人類の生き方について、一つの継承と具体的なモデルを提示していると感じています。これは非常に面白い事です。今までの文明は大都市から発展、出てくるものが多かったと思いますが、どうやら状況は変わったようである。従って、我が軽井沢町は、その様なスタンスで、やはり地球的に発信できる様な新しい文明の生き方を提示する必要がある、それが可能な街だと思っています。

資料に掲載している言葉は、あまりこなれておりませんので、最終的なレポートにはもう少し分かり易く書くつもりです。まずは、問題意識から書いております。破綻の予兆とやや大げさな事を書いておりますが、気候変動による地球環境の悪化や自己破壊についてはかなり前から言われております。よく考えてみると、もうその様な問題自体が古典的であって、最近ではより深刻な問題が発生しています。特に経済関係で言いますと、グローバルリズムや市場原理主義という様なものが、非常に大きな影響を持っています。ローカルな文化や経済システムの蓄積、地域の自立が非常に危うくなっています。これは非常に困った事であります。更に生命科学等の技術の発展により、生命、遺伝子自身を操作する事が可能になってきています。それを活用した医療や農業生産等の飛躍等もありますが、生命の倫理に関する深刻な問題が出てきたと思っています。また、情報科学の発達による仮想現実等は、非常に過度になっており、一種の人格崩壊や人格錯乱が各国で問題になっています。更には、物質工学の進歩によって本モノと偽モノの境界が分からなくなっている問題もあると思います。要するに総括的に言うと、価値判断の根本がぐらつきはじめたという非常に根底的な不安が生まれてきたという事です。勿論それに加えて、高度成長が招いた結果の高齢化や身体的健康な基礎的な問題についても深刻になっている事もあると思います。これについてこれ以上は細かく申しませんが、いずれにせよ、これらは大きな問題として出てきていると感じています。

ところが、そういう問題を引き起こした一つの原因は、自然科学や技術の発展であるが、それはマイナスだけではなく、実は次の世代に橋渡しするようなポテンシャルを持っているという事があります。その事が「その先の希望」という事です。ここに書いてある事は、例えば、観測天文学の進歩等ですが、宇宙のイメージが非常に変わってきたと思います。私は小学生の時、天文少年で、自分で望遠鏡をつくり色んなものを見る事が大好きでした。あの頃の天文学と現在の天文学は全く学問の内容が変わってしまっています。宇宙のイメージそのものも勿論変わりました。自然像の改訂という言葉を書いておりますが、なぜこの様な事が大事かと言いますと、実は人類は中世から近世に移る時に大きな自然像の転換を体験しています。ガリレオの観測天文学やコペルニクスが果たした役割等様々な事がありますが、今

は地理的発見の時代として地球自身に対するイメージがまるっきり変わっています。このために、所謂、宗教的な世界から近代の世界に拓く契機となったわけで、大きな文明の転換期となったと言えます。いずれも、技術とサイエンスの果たした役割です。非常に深刻な問題をもたらした一面もありますが、次の時代への一つのきっかけをつくったという皮肉な形となっています。その結果、どういう事になったか言うと、人間のそのもののイメージが変わってしまったという事です。今までは人類というものが全て中心であり、世界を動かしているという考え方で、非常に市場原理主義に近い考え方だったと思います。しかし、そういうものではなく、金（キン）を抜き取ったら小さなエピソードに過ぎない事だと、しかし、それがかえって艶と潤いを纏っているように思われる、つまり、小さくなった人間像がかえって非常に慕わしく思われる、そこから本モノ志向や節制質朴の渋い輝きが生まれると思っています。軽井沢は色んな方が一つの100年の遺産としてストイシズムであった。地元の代表の方が何でも行いストイックな文化をつくっていたと思います。それを引き継ぐべきだと盛んに話しておりますが、これは節制質朴の渋い輝きであって、決して貧しさではありません。本モノが求める渋い輝きというものに対する芽が開かれてきたという事です。その内容はあまりはっきりとしませんが、要するに近代を超える自然像や人間像の芽生えが見えてくるだろうという事です、それが何であるかを皆で追いかけているというわけです。先程のフライブルグやダボスでは、個人レベル、小さな自治体、村のレベルが豊かで、生活を楽しんでいる不思議なところだと思います。そういう事に対する芽が拓いてきたのが今ではないかと思います。この様な動きに貢献できるだけの100年の知的蓄積と思想的蓄積があるわけですから、それを利用して先に進むべきではないかというように思っています。日本の中で、そういう事ができる街はそうないと思います。もしかすれば、京都は何かやろうとしている動きがあるかもしれませんが、京都と軽井沢は性格が違いますので、競争する必要はないかと思います。大きな思想的転換を実現するだけのパワーを持つ時代になってきたという事だと思います。

それをどの様に考えていけば良いのかについて、(2)三元自治の回復として書いております。要するに問題は、政治的自治という問題もあるけれど、文化的自治や自分の身体を外からの侵害から守るといふ自治もあるかと思えます。色んな意味で三元というのは、自分の身体、コミュニティの自治、それから環境、大地の問題である環境自治の三つの自治を一つの基盤に考えてはどうかという事です。事務局が用意してくれている資料の真ん中の帯にある左側の三角形の概念図がありますが、字が小さくて細かく申し上げるつもりはございませんが、少し説明をさせていただきます。一番上に大地と書いてありますが、環境というだけでは意味が分かり難いので具体的に大地としております。右側はコミュニティとして絆と書いております。絆の問題をどう回復するのかは、色んな問題を考える上で非常に根本的な問題になると思っています。左下は身体と書いております。これは個人と言っても良いのですが、個人等の主観の抽象的な言葉は使いたくないと思ひ、身体としております。身体というのは、勿論、健康等の個人の問題である主観も入っておりますが、身体、コミュニティ、大地のこの3つの大きな柱から新しい文明をもう一度考え直していつてはどうかという事です。この三角形の中に細かい字で色んな事が書いてありますが、この3つの基礎から立ちあがっていく建築物の中に、今後われわれが考えるプランニングの材料のようなものを記載しています。例えば、トラスト制度の事やコモンズ（入会地）等もあります。これは後で申しあげますが、この様にプランニングの種はたくさんあるわけです。皆さんのプレゼンテーションの中から引っ張り出したものもありますし、そうでないものもありますが、幾つか重要なプランニングのキーワードになるようなものを書いてございます。大地、身体、コミュニティの中間に気を書いております。人の気は、人と人の間の社交の問題です。地の気は場所、天の気が生命と

しております。ややこじつけの部分もありますが、古風な言葉でくくった図式でございます。この3つの図式の中から色んな考えがでてくるのではないかという私の考えです。3元については、この様な事を考えております。要するに、人間社会の自治組織の価値の根源が崩れさっていく時代に対するライフスタイルを考えたいと思っています。それは新しい自然観や人間観、それによって美意識の改訂と価値の問い直しをやることだろうと思います。そういった場合、大都市ではなく、新しい地域主義が中心となるという事です。

(3)で、その要約的なものを書いております。元気を浴びる町というタイトルをつけましたが、これは、元気という言葉は、「元」は大元という意味で、「気」はスピリットです。万物生成の精気としての根源の気力というものが「元気」です。これは辞書に書いております。そういう意味で、元気が良いという事は辞書の二番目に記載されています。元気という言葉の大元は良く分かりませんが、恐らく、易経のような古い古典から出てきた言葉だと思います。根源の気力というものをどう取り戻すかという事だと思います。生命への慈愛や希望を取り戻し、新しいライフスタイルを労働観によって未知の文化創造へ向けて立ち上がるというような事になります。どうすれば元気というものを活発にすることができるのか、こういう所かと思えます。

3つの柱から立ち上がってくる新しい建築物があるとすると、5つの建物があるという話をこれから致します。全体を総括いたしますと、軽井沢風土自治圏という言葉を使っておりますが、風土自治圏は、軽井沢全体が風土的な自治圏という事で、必ずしも政治的な話ではございません。風土という一種の文化と自然が混じったようなものを自分達で大事にしていくというだけのものです。それを自治であるという言い方をしています。この様な事は軽井沢の知的伝統から見ても十分可能であります。それを使って何をするかは、人間中心的な歴史観を別の歴史観に変えていくという事です。人間中心主義をやめるという考え方は少し御幣をよぶのですが、本当の意にかなうのは、人間ではなく人類中心主義です。人間を無視する事ではありません。人類が全て何でも決めるという事ではなく、生命的なある世界の中で人間は生かされているに過ぎず、そこから新しい文明が出てくるのではないかという事です。

それをやるために3つのデザイン領域を提案しています。この三角形の図をもう1度ご覧ください。大地、身体、コミュニティの3つの柱の中に、様々なプランニングの種をばらまいてありますが、まだ幾らでも出てくるのですが、思いついたものを書いております。ばらまいただけでは何もならないので、3つのデザイン領域でまとめています。デザインでまとめ、最後はどこに辿りつくかということ、新しい風土自治という事にいきつきます。その3つのデザイン領域がどういうデザイン領域かと言いますと、大地は風景デザインという名前と呼んでいます。風土は非常に抽象的な面がありますので、目に見える、感覚で分かるような形に転換する事が風景デザインです。普通我々が考えている山や農村を綺麗にする事も勿論、風景デザインの中に入りますが、それだけではなく、例えば食文化等も明らかに風土の風景表現だと思っています。料理も文化として毎日食事するわけですから、どういうお皿にどう盛り付けるか、どう味付けるか等、味覚や触覚、嗅覚に関係してきます。風景表現は、感覚表現と言っても良いかなと思っています。その中には伝統的な意味での景観デザインは当然入ってきます。2番目のデザイン領域は、コミュニティデザインです。浅野先生からお話いただいたシェアについて問題提起もありますし、あるいは文学やアート等のクリエイターが人と人とを結びつける役割等、様々な可能性がございます。コミュニティの再生という問題があります。最後は元気支援デザインと書いてありますが、これは、要するに人間があまりにも大地から離れてしまった事です。身体と地縁を強化する計画、浩然の気を涵養する等があり、スポーツ等はその重要な問題になると思います。スポーツの問題については黒須先生

からお話がありましたが、スポーツをもう少し広く考えて、人と人を結びつけるスポーツコミュニティの考え方ができないかと思っています。この身体・大地の血縁という言葉は進士さんのプレゼンテーションの最後に番外として話された事が印象に残っており、そこから考えました。これからのリゾートは農業である、リゾートに来た人は皆、百姓をやらなければ駄目だとおっしゃっていました。これは、やはり大事なメッセージだと思っています。この様な事は元気支援デザインです。大きく分けるとこの様な3つのデザイン手法を使いながらまとめていくのですが、3つ柱から5つの建物が立ち上がっていくものを第2章で「軽井沢風土自治権五原則」という名前でまとめています。五原則は(1)～(5)まであるのですが、天・地・人のまちづくりとして「自治、共有、健康、創造、風土」の5つのキーワードを書いております。この5つのキーワードがそれぞれの割り当てたものが(1)～(5)になります。これが風土自治圏五原則になります。一つずつ説明差し上げますと、(1)は軽井沢風土自治のという自治の問題になります。この場合の自治は、比較的行政自治に近い事を書いておりますが、絆の継承と発展となります。軽井沢は既に自然保護対策要綱や軽井沢の善良なる風俗維持に関する条例等があり、この様な事を実施している自治体は他では聞いた事がないのですが、軽井沢では既に実行して、皆さんがそれに従っているという現実がございます。これは継続発展させていくべき建築や尽力であって、ゼロからやれるわけではないと思います。この5つは、軽井沢に既にあるものを発展させていくと考えて宜しいかと思えます。軽井沢風土自治の中には、花里さんがお話された地区計画の問題も入れております。軽井沢には既に様々な建築の規制がありますが、もう少し総括的に地区計画を実施してはどうかという話になります。もっと言えば、タウンマネジメントやトラスト等のアイディアを入れています。赤で記載しているのは、今後作業班がコンセプト画を描く際には代表的なものを取り上げる事になりますので、その時の一つのテーマとなり得るかなと思っているものです。(2)は、場所の多様性という事で、各題では共有と共生としています。軽井沢は場所によって様々な多様性があると言われていました。人口2万人のまちにしては様々な多様性があると思います。一つのプロジェクトの中に色んなものが混在しているという意味での多様性もあります。その中で、デュアルモードLRTと書いておりますが、これは浅野さんからお話にも出てきた事になります。将来、この町の交通システムを考えた時、歩行者、自転車等色んな手段はありますが、もう少しまとまった大量輸送機関ができないかという事です。デュアルモードは、バスタイプと鉄道タイプが一つになっている事です。名古屋ではその様な例があるそうですが、それはバスが途中から軌道にのるというやり方です。ライトレールを新しくするイメージですが、現在のしなの鉄道の軌道に途中から乗り入れる事もあるのではないかと考えています。交通に関する共有と共生になります。技術的には様々な問題がありますので検討が必要ですが、この様なやり方で、例えば旧軽井沢から新軽井沢まで行き、そこから、しなの鉄道に乗り入れるとか、あるいは昔の碓氷峠を越えて入ってくる信越線が空いているものを、勿体ないのでライトレールを走らせる等、色んなアイディアがあると思います。この様な少し長期的な姿を出しています。これが2番目の共有と共生のキーワードになります。

(3)は、生命の輝きと題しておりますが、健康の問題についてです。ここに書いておりますように、ウォーキングやサイクリングトレイルをつくる事や地産地消、食文化、将来的なスポーツコミュニティをやる等、様々なアイディアがありますが、その中で一番画として書きやすいものは、ウォーキングサイクリング・トレイルになるかと思っています。これは現代もある程度出来てきているので、それをもう1度再編成して大きくする事になろうかと思っています。これが3番目の健康、生命に関する問題です。

(4)は、知と情の饗宴とありますが、これは一つ代表で言えば、創造性の問題になります。この中

の創造には、教育や学習の問題も入ってくるので、(4)の中のどこかに言葉として入れるべきだったと思っています。既に学俗接近とか、これは後藤新平さんが軽井沢の夏期大学で使った言葉ですが、この様に既に教育の実績があります。森山さんのレポートにも出てきましたが、小林りんさんのスクール・オブ・アジア等が参考になるかと思いますが、この様な教育の問題もあります。私が出したのは、将来の問題提起、つまり将来の文明のあり方を見つめるという非常に大きな話ですが、話は大きい様に見えて、実は非常にローカルなところから手をつけなければ出来ない問題だと思っています。一見大きい様に見えていますが、実は食文化の様にリージョナルな問題もあります。そういう問題に関して一歩先に出ようという事ですので、逆に言うと、教育的な面が強いと思います。軽井沢に行けば、フライブルグやイタリアの小さな街の様に、将来の人間の姿が見えてくるという事です。軽井沢全体が、いわば学校の様なものだと考えれば、これは教育のプランニングだと言えない事もないと思います。その中で、アートの問題もあります。クリエイターズ・コロニーと書きましたが、軽井沢ではクリエイターは文学が主流でしたが、美術館に関しては多くのアートがあります。他にも色々なクリエイターがいるわけですので、縦割りにしないで、もう少し新しいタイプのクリエイティビティを考える様な場所が何か出来ないかと思っています。具体的には良く分かりません。私が聞いたのは、八ヶ岳の山麓に芸術家村があり、そこで生活ができる様になっているそうです。その様な新しい芸術家を中心として一般の方も入れる様なコロニーが出来ればと考えております。

(5)は、風土というキーワードに関するもので、懐かしい未来への風土へと書いておりますが、要するに人類に対する普遍的な環境を新しく元気にするという事です。未来だけでも実は懐かしい人間の体温、それから生命の輝きがあるように、それをつくっていく事です。軽井沢は、軽井沢が持っている浅間山を中心にしたスケールの大きな地相、土地の姿があります。懐風掬水という耳慣れない言葉を書いています。風を懐に入れて水を掬うという私の造語です。あまり満足しておりませんが、昔は、蔵風得水と言っていました。風を根底にしながら水を得るという意味で、この様な地相が良いと言われておりました。これは昔の古い風水思想になりますが、ここではもう少しモダンな風水思想を考えた方が良いと思っています。それから、原風景の形をどうするのか、風立ちぬのメッセージは何なのか等、この様な事を考えながら、全体として、軽井沢の浅間山を中心とした雄大な大地の起伏と水の流れをもう少し我々が鮮明に意識できる様にしたいと考えております。

少し時間が厳しいですので、3章にあたります原則の方法的特徴は飛ばさせていただき、本日の一番大事な話、8頁の制度の提案についてお話をさせていただきたいと思っております。

精度の提案はこれから色々やっていく事になりますが、その中の1番目として「コモンズの設置」について書いております。コモンズは皆さんもご存じの通り入会地の事でありまして。昔の入会地そのものを復活させる事は勿論あり得ませんが、新しい未来型のコモンズが提案できればと思っています。コモンズは言ってみれば、ある場所を共同で労働する事です。主に農業のための肥料をつくったり、屋根をふいたりしていた共同場は、その人たちの共有の財産です。この様に共同で作業するという事が人と人とを結びつける事になります。そういうものを新しい形でつくってみてはどうかと言う事です。コモンズの機構をどうするかについても書いておりますが、これは後で時間があればご説明します。

最後は具体的な提案にまいります。10頁に各地区コモンズの可能性と題しているものがございます。各地区とは、作業班に絵を買ってもらっている5つ地区の将来像になります。旧軽井沢地区、風越地区、くつかけ、湯川周辺地区、矢ヶ崎公園周辺地区、こもればコモンズ周辺地区がございまして。5つ地区がございまして、それぞれの内容につきましてはこれから考えるのですが、好都合な事にある程度のみと

まりとある程度のコモンズの組織とそれに入る建築物が既にあります。それを使って、各地区の一つの目玉としてコモンズをつくってはどうかという事です。

その第一が風越ゆうすげコモンズです。これは風越山もあるのですが、アイスパークを中心としたスポーツです。あえて言えば総合型スポーツコミュニティ、スポーツコモンズになります。ただ、ここでは従来型のスポーツだけでなく、周辺の農村の問題や里山農村マネジメントと一緒に考えてはどうかと考えています。ゆうすげコモンズの少し南の方に新しい大きなマルシェをつくろうとしている動きもございます。そういうものとの連携も勿論あると思います。それとこれも教育の問題と関係しますが、宿泊つきの通年型青少年総合スポーツセンターを考えてはどうかとアイディアもあります。ここは、ただスポーツをして終わりという事ではなく、新しいコミュニティ、新しいライフスタイルをつくるきっかけとしてスポーツをするという考え方です。ここに文学、アート、芸術関係も一緒につくるという考え方もあります。ここではなく、その様なものは大賀ホールのある矢ヶ崎公園の方が良いという考え方もあります。場所は分かりませんが、クリエイターズ・コロニーの様なものがつくれないかという希望がございます。具体的な話はこれからになります。

私が最も期待しているのは、くっかけ・湯川コモンズです。既に湯川ふるさと公園という大きな緑地があって、沓掛宿の南北にくっついていてます。公園の方には建物はあまり無いのだと思いますが、くっかけの方に中軽井沢駅とくっかけテラスがあります。この建物は当然くっかけの新しい中心になると思いますが、それと付かず離れずの形でくっかけコモンズをつくりたい。これは総合型のコモンズになるかと思いますが、農業や食文化にも関係しながら、何らかの学びのセンターがつかれないかと思っています。地元の方からの聞き取りでは、カレッジセンターの様な事をおっしゃっていました。要するに、学びと人の交流を結びつけるもので、教育という事に非常に強い意識を持っておられました。これは正にあっていてと思います。最終的にはダボスの様な国際会議があるとすれば、開催できる様なイメージです。作業班の方でも検討しておりますが、湯川を挟んで左岸の方（湯川の東側）に町役場を中心としたシビックセンターがあります。福祉関係の施設もございます。川を挟んでおりますが、その事も意識した上で検討したいと思っています。

次はこもればコモンズです。ここにも既に立派な福祉施設があります。近くには追分宿もありますので、そういうものとの関係からも可能性が高いところです。ですので、ここは福祉型社交コモンズとでも名付けておいたらどうかと思います。福祉を行いながら、社交センターもある感じです。また南側に広がっている農村の里山地帯が大変素晴らしいです。これを上手く利用する方法はないかと思っています。

次は矢ヶ崎コモンズです。矢ヶ崎はご存じの通り、この会場の近くです。施設としては既に大賀ホールがございます。ここは指定管理者でNPOが運営をしています。風越のアイスパークも同じでNPOが運営をしています。既にコモンズの非常に近い形になっています。

それから軽井沢コモンズです。ここは我々の中で一番の問題になっている所です。観光地、観光者の中心となってしまう評判が悪いのですが、良く見ると、旧軽井沢に直交する様な形でパウロ教会やユニオンチャーチや熊野神社別当寺、諏訪神社等のかなり多くの宗教施設がございます。一番北には愛宕神社もございます。それが丁度、銀座通りと直交している事を利用して諏訪神社の周辺、十字路辺りに、マルシェ祝祭プラザと書きましたが、新しい形の中心をつくって、観光と言っても軽井沢は違うという所を見せて、観光に来る人を教育しなければならないと思っています。その他、西武リゾート、星野リゾートもありますが、民間ですので、何らかの連携の可能性が探れればと思っています。

これらの他にも制度の提案をしたいと思っています。市民トラストの問題、タウンマネジメント等を考えています。タウンマネジメントは色々なやり方があるのですが、滋賀の長浜が取り組んでいる様に市民団体がある種の不動産経営を行い、好ましいまちに変えていく事をやっています。この手法が良いかどうかはありますが、本格的なマネジメントをやってはどうかと考えています。

(4)については、まだ煮詰まっていないのですが、よくよく考えますと、この様な問題は軽井沢だけでは完結しません。日本の山の背骨(アルプス)を挟んだ辺りには高原地帯がたくさんあります。西からいくと、白山を中心とした非常に広い山岳文化圏、古い文化圏がございます。それから御岳木曾文化圏、上高地文化圏や伊那・諏訪・両アルプス文化圏、この辺りも非常に魅力的なところです。そして少し離れて八ヶ岳・浅間・白根文化圏があり、いずれも列島高原文化の連合であり、一つの日本の高原文化の全体を描き出す事ができれば非常に面白いと考えています。現在はこれの中に風景街道が全部で6つか7つ既にありますが、全てバラバラですので、それを結びつける事ができれば良いと思っています。既に結びつけるだけの立派な国道と高速道路も通っており、解釈だけで考えればある事になります。高原文化圏を縦貫する様なある種の構想も可能ではないかと考えています。

これ以上は時間がありませんので、これくらいに致しますが、一番大事な事は、やはり、世界に発信できる小さな街であります。大きな話に見えますが、非常にローカルでリージョナルな問題もございませぬ。その中で新しいフィロソフィーを打ち出す事が、この会議の最も重要な役割だと思っています。それに従って具体的な提案はこれから検討したいと思ひます。以上です。

私から少し紹介しましたが、引き続いて、作業班から「中間報告に向けて」をお話頂いて、その後に意見交換をさせていただきたいと思ひます。

軽井沢町グランドデザイン像作成事業 中間報告

意見交換【ワーキングランチ】

中村委員長：

どうも有難うございました。この後はワーキングランチという事ですので、ご自由にご発言頂ければと思ひます。随分、盛りだくさんの内容になりましたので、ご理解頂けなかった部分もあるかと思ひますので、どうぞご質問下さい。

花里委員：

資料 2-4「中軽井沢地区」のハルニレテラスと結ぶ川沿いのプランは非常に良いと思ひます。現在は鉄道の高架下部分は自動車の抜け道になっているだけです。その川沿い部分が良くなると、軽井沢の発展にプラスとなる印象を受けました。しかし、実現するには結構難しいのではないかとと思ひます。



横島委員：

どのプランも全て難しいと思います。難しさは問わなくても良いと思います。

単純な誤字脱字について修正をお願いします。後に外に出た場合、意味が違っておりますと困りますので、細かい事ですが、この場で述べさせていただきます。資料1の8頁目「風土自治権」は「風土自治圏」に、11頁「西部」を「西武」に修正をお願いします。この2点になります。

中村委員長：

大変失礼しました。修正させていただきます。

事務局（二井氏・幹事会委員）：

会議内でも度々ご意見が出ていましたが、住んでいる方、地元の方に向けた場を作る事が大事であり、どの地区にも共通した大きな課題があるのではないかと感じています。中村先生もお話されていましたが、元々ある様々な資源が上手く繋がっていない場所が沢山存在すると思います。特に資料2-4の中軽井沢地区でお話しますと、人が訪れる場所である「町役場」があり、また、最近、人が来る様になった「くっつけテラス」があり、更に「長倉公園」「湯川ふるさと公園」とその水辺等の資源、場所があります。そもそも、人の行動から離れて「ついでに立ち寄る事ができる」事が一番理想的な形だと思います。町役場に行ったついでに公園へ寄る、図書館に寄ったついでに公園に行く、そのついでのお店に寄る等、「ついで」をどんどん増やしていく事で、自然と様々な年齢層の方々が集まる場所が出来るのではないかと思います。土地の問題は色々とおもうかと思いますが、各場所がしっかりと繋がる事が大事になってくると思っています。

旧軽井沢も、本来、「道」は時によって様々な使い方をされるべき場所ですが、実際は歩いている人ばかりとなっています。本当はお茶を飲んだりしている方が居るべきなのですが、溜まるという行為ができる空間が現在はない状況です。そこで水を利用したり等の工夫で溜まれる空間を作る必要があるのではないかと思っています。

浅野委員：

中村先生の思想と原則は、よくここまで昇華して頂いたと感じています。しかし、その次のコモنزを具体的な図面に落とし込んだ途端に元に戻ってしまう心配があります。今までの話を中村先生に整理して頂いたコンセプトを生きる様にするためには、どうしたら良いのかという事が気になっています。非常に難しい事だと思っています。そこをしっかりとしなければ、今までの総合計画と何ら変わり無い計画に陥ってしまいそうな気がします。図面に入る前に、コンセプトの内容をどう図面に反映するのか、もう少し詰めた方が良いのではないかと思います。

中村委員長：

コモنزで一番重要な事は、行政から独立する事だと思います。町民、この場合は別荘民も同じとして考えた方が良くと思いますが、その様な形のコモنزが出来れば良いと思っています。現在ある「旧軽井沢クラブ」は小さなクラブであり、小さなコモنزとなりますが良いモデルになると思います。NPOの様指定管理等、仕組みの問題が一番難しいと思っています。内容は、共同作業をする事が大事だと思っています。その共同作業が何かという事は資料内には記載していませんが、一番希望を持っているのは「農業」です。昔からある家族単位で行う「クラインカルデン」の様なものもありますが、もう少し大きな単位で、町民が自ら集団で作業する新しいタイプの農業があれば良いと思っています。作業が発生しないとコモنزにはならないので難しいと思っていますが、出来るだけ良いアイデアを検討したいと思っています。良い事例等があれば、大変有難いと思っています。

現代の里山は、共同利用が残っているのでしょうか？良い例がありますか？

この前に「稲田」に行ったのですが、100ha 級の入会地が残っていました。その半分はゴルフ場になっているのですが、残りの半分は森林浴として活用されています。調べれば、幾つかの事例は出てくるかと思えます。

浅野委員：

マタギがまだ活躍している岩手県の山奥等では、コモンズがあるのではないかと思います。

藤巻委員：

軽井沢町「塩沢地区」でも共有地を持っています。皆で草刈りをしたり、水路を整備をしたりという作業を行っています。

中村委員長：

現在も続いているのですか？

藤巻委員：

続いております。共有林があります。

中村委員長：

共有林には地権者の名前が書かれているのですか？

藤巻委員：

書かれているものがあります。村の人間が共有の地権者になっていると思います。第3組合が別にあります。

中村委員長：

英国の場合でもコモンズが消えてしまう危機があり、1860 年頃にコモンズ保全協会ができています。現在はロンドンのハムステッドですが 350ha くらいあります。普通の公園の使い方とどこが違うのかというところよく分からないのですが、17 種類のスポーツができるそうです。その中の一つに「クロスカントリー」があります。山あり谷ありの地形を持つ場所ですので、普通のゲーム性が高いスポーツとは違うスポーツを取り入れています。幸い軽井沢、少なくとも土地があり、中心となる施設も幾つかあります。後は制度だけの問題だと思います。

進士委員：

私も浅野先生のご意見と同じで、大変良く体系化して頂いていると思います。その他についても同意見です。繋ぐという事がコモンズ単位の絵に伝わっていないと思います。浅野さんが指摘した通り、現実的な課題に対応しただけのエリアデザインになっており、全体の思想を落とすという繋ぎの部分ももう少し絵に入った方が良いと思います。そこは色んなやり方があると思います。作るプロセスでコモンズによる共同作業を入れる事もあると思います。プロセスの手前には思想教育（思想の普及）が必要だと思います。21 世紀を先駆ける生き方をしようという神前な思想なので、それを学習して共有する事が大事だと思います。それが形として具体的なアクションとして図面に入ってくるように上手に繋げる事が出来ればすごく面白くなると思います。

例えば、矢ヶ崎公園で言うと、ご指摘通り、洪水調整池なので面白味がない空間となっていると思います。植栽計画も大事、浅間山を映す事も大事、底辺（汀線）がとにかく真四角なので良くないと思います。駅からの大賀ホールへのアクセスでは、2 辺を周る必要があるのですが、単純に言えば中国の西湖の西湖堤の様に、泥を浚って道ができたのですが、アーチ橋が架かったり、世界的な風景となっています。この様な作業が矢ヶ崎公園で出来れば、すごく立体化すると思います。細かく作りこんでいくシナリオ

をしっかりと作る、何のために整備を行うのか、子供が関われる場所、大人が関われる場所、体力がない方は知的なもので、プロセスを記録したり、絵にしたり、詩心がある方は詩を読んだり等、細かくシナリオをたてる事が出来れば、この高い思想を現実化する事ができるのではないかと思います。

聖の道は良いと思います。また水を表面に出す事は、スイスやドイツでは多くの事例がありますが、とうとうと流れがある水は迫力があり良いと思います。開渠にする事だけなので簡単にできるので、良いと思います。しかし、それを諏訪神社までどう持ってくるのか、真っ直ぐ1本で良いのかは、検討する必要があります。諏訪神社に水路の最後として「聖なる池」が出来れば良いと思います。

花里委員：

「水車の道」に水車を復活させる事も良いと思います。昔は水車がありました。

進士委員：

現在は道しかないのですか？

花里委員：

小屋は残っているので、それを復活させて、銀座通りが1軸だとすると、北側が2軸目、南側が3軸目の道を全体的に整備する事が出来れば、広がりがあり滞留性も生まれてくるのではないかと思います。

進士委員：

「聖の道」の他は、「俗の道」になるのですか？俗の道とは表現しないと思いますが、「聖」とすると、その他をどう位置付けるか気になります。静かな「静（せい）」なら、他は動きのある道として「動」として位置づけられ理解できるのではないかと思います。私は仏教なので、教会が「聖」ともあまり思いません。

中村委員長：

下手をすると両方とも俗になるかもしれません。

進士委員：

都市の中には、静かな空間とやや賑わいのある空間が両方ともあっても良いと思います。また、それを通して水が貫く、水の循環を想像させる事も大変良いと思います。

関係がないのですが、「農の風景写真コンテスト」に17年間携わっています。写真集ができたので、お持ち帰り下さい。これを実施するきっかけは、東京の宅地並み課税が始まった際に農地を残そうと思って始めました。最後のページに今までの17年間で指定したリストがあります。東京で農のある風景を守ってきました。これは軽井沢でもそのまま活用できると思います。ぶどう園、沼があれば蓮田をつくる事ができ、多様な風景を創出する事ができます。環境問題で言うと、生物多様性になり、風景としてはランドスケープダイバーシティとなります。一方でそこに参加する事も重要となります。例えば、蓮は通常、水圧で掘るのですが、蓮田に潜って取る「蓮根取り」は相当な冒険になると思います。全てアクションで繋がります。昔のコモンズは生きるために必要でしたが、これからは環境維持と自分自身の楽しみのために必要になると思います。農業用の「掻い堀り」は、元々は池の掃除のためでした。昔の山国では、そこで魚（鯉）を捕ったりしていたので、タンパク源の元でもありました。しかし現在では、完全にレクリエーションになっています。掻い堀り体験は、子供たちが泥だらけになり魚を追っかける事ができる非日常的体験です。中村先生の思想とプランの間にこの様な事を入れる事が必要だと思います。思想は体系的には理解できるが、それを身体に落としていく作業が必要だと思います。そうでなければ、皆が乗ってこないと思います。その場をつくる事がコモンズのプランだと思います。そこを三角形でしっかりと繋ぐ事ができれば、現実的に作れると思います。

森山委員：

浅野先生がお話した事を、もう少しはっきりと申し上げたいと思います。中村先生の資料に「労働観」が2度出てくるのですが、素晴らしいと思っています。軽井沢未来構想会議が「軽井沢グランドデザイン」という紙（絵）になると思うのですが、「労働観」を具体化するテーマがあまり出ていないと思います。もちろん演習農園や地産地消という言葉は出ているのですが、軽井沢にとって「労働観」は大きな問題であると思います。人間は8時間毎で生産、消費、再生産のために寝ている事になります。軽井沢の地元の方はその様に生活しているのですが、別荘族は必ずしもその様な生活をする必要がありません。そうすると、農産物だけでなく、一次産業でも二次産業でも三次産業でも芸術でも、100年後に何を軽井沢が産出しているのか、一人でも多くの方が8時間を投入する結果、住んでいる人が実感できるものが旗印でなければ、グランドデザインとして絵に描ける部分があっても内実が生きる事の実感を持てるのかどうか疑問です。別荘族は自分の主たる産出は他にあるので、ここで何を生み出すために生まれてきたかを問う必要はないのですが、住んでいる人はそうはいかないと思います。その1点について言えば、別荘族と住民は時間配分が違うので、その「労働観」のイメージが異なるのではないかと思います。この様な事柄から見ても、軽井沢未来構想会議とグランドデザインの間に少し隙間がある様な感じがします。小さくても良いのですが、最先端医療、最適医療、フードバレーの様な「産出する」、「研究する」ものがあれば良いと思っています。未来構想とグランドデザインの間繋ぐもう一つ項目がなければ、いわゆる国土計画の様なものになってしまうのではないかと思います。

中村委員長：

幸い今は12月ですので、今年度は少なくとも3か月間あります。先生方にはその様な具体的なイメージを出して頂きたいと思います。

ヨーロッパのローマ帝国が崩壊した後に起きた事を調べてみると、簡単に言えば、修道院を中心とした新しい農業の形と農業加工品、開墾等の活動が小さな宗教信仰精神を作ってきたと言われていています。その中心として関わってきた人物は、ローマ時代の貴族です。今で言う有閑階級になりますが、労働は奴隷にやらせていました。それをひっくり返したのが修道院であり、リードしたのは貴族になります。「労働」の観念も今後は変化してくるかもしれません。別荘族であっても、何らかの形で労働を行うのではないかと思います。ただ家の中で本を読んでいる様な事だけではないのではないかと思います。その辺りは議論のしどころですが、別荘民にも入って欲しいと思っています。しかし、どの様な形にすれば入事ができるのかについては今後知恵を絞る必要があると思います。

花里委員：

森山先生が言われた事に関して、軽井沢は祝祭都市でも良いのではないかと思います。ザルツブルクの印象が強いのですが、クラシックの成都として音楽を楽しむ町であり祝祭劇場もあります。労働の楽しさや、軽井沢に来ている方の楽しさも大切で、ご飯を食べる事等も大切だと思いますが、軽井沢は、きらりと光る瞬間という様な場所ではないかと思っています。



中村委員長：

それはあり得ると思います。軽井沢には大賀ホール等がありますが、実際にどのような事を行ったら良いと思いますか？森山さんのレポートでもフェスティバルについてご提案があったと思います。商工会中軽井沢支部の方が話していた国際会議場の設置も一つだと思います。祝祭で品の良い事ができれば良いと思います。

進士委員：

祝祭もあって良いと思いますが、バランスが必要だと思います。祝祭は非日常的の事で、年に数回かで1年中あるわけではありません。それ以外の日常にどのようなライフスタイルを創出するのが大事であり、先程話した「農の風景」は、その様な日常の事になります。「労働観」という言葉は、軽井沢では辛いのではないかと思います。今後の時代に身体を動かす事は、生活する糧を得るための労働ではなく、動く事自身に意味がある事が重要だと思います。スポーツやレクリエーションに近いと思います。これからの時代は、もう一つ、環境寄与だと思います。環境にどう貢献しながら生きるかだと思います。この様なライフスタイルを考えると、カーリングや畑等の様々なものがあり、それを好きにチョイスができれば良いと思います。日常をどうするかについて町民、特に別荘族に訴えるものは、軽井沢に来れば健康になり、環境にも貢献できる、人的なネットワークもできる、自分の部屋に居るよりは楽しい事出来る事だと思います。この様な新しい暮らし方をコモンズの目標とし、それに向かって参加してもらえば良いと思います。其々の方のキャリアが効いてくると思います。アート等、其々が持っているキャリアで貢献できれば良いと思います。生活の糧のための「労働観」とは別の違う言葉、例えば「生活観」や「社会貢献観」等とセットにすると分かってもらえるのではないかと思います。

中村委員長：

そうですね。身体を動かす事が出来れば良いと考えています。「労働」は確かにお金を貯める「労働」と間違えられるので、良い言葉を探したいと思います。趣旨は良く分かりました。

進士委員：

厚生労働省の厚生はどのような意味でしたか？

浅野委員：

福祉です。

進士委員：

それでは、「福祉観」ですかね。

くっかけテラスから北側は良いと思います。三角形の交点にある農地に、先程話した様な場を作ってあげる必要があると思います。

ウォーキングサイクリングトレイルの図等は想像がつかますので、イラストにしても仕方ないと思います。中村先生の思想をもう少し場所で表現できる様に出来れば良いと思います。くっかけテラス型のコモンズライフがエンジョイできる様な暮らしのイメージ、アクティビティの姿が想像できるイラストが必要だと思います。ハードのトレイルやパーク&ライドの絵等は定番すぎるのではないかと思います。それを行ってしまうと、先程の浅野先生がお話された様に今までと変わらない計画ではないか、と言われてしまうと思います。

事務局（二井氏・幹事会委員）：

どのような絵でも、文章の中で各自皆さんが膨らましている内容が現実の絵になった瞬間に話が小さくならざるを得ない所もあると思います。

進士委員：

パースを辞めて、ゾーニングのネームやキーワードを付けていく手もあるかもしれません。

浅野委員：

今日提示して頂いた絵は、最後の最後で良いと思います。しかし、今日は全体のイメージを共有化、把握するために提示して頂いた絵だと理解しました。

横島委員：

最初の約束もお願いは絵になります。文字から絵になった時の劣化は百も承知しております。しかし、町民に正しい理解をしてもらうためには、劣化するかもしれない絵の裏に、町民の意識として見えない形の支えがあるだろうと思っています。それをパースの中に残すのか、付属資料内に残すのかは報告の技術との関わりあいがあるかと思っています。

町民と別荘民の労働は基本的には違います。その労働の位置づけは、相当哲学的に考えておかなければ、損をきたす可能性があります。そういう意味では大事な領域だけでも怖いと思っています。次回、時間がございましたら、その所話をさせて頂こうかと思っていますが、この資料 2-1 の「原則的方法的思想的特徴」の 2 に中村先生が「自己言及性」を出されています。それには「客観的な将来像の達成のなかで、関係者の自己変革を求める」という一文があり、これが隙間を埋める思想になるのではないかと思います。その自己改革を求める手法が何なのか、については非常に難しいと思います。しかし、それを置いて、外（先生方）からの意見のみで押し付ける事はできないと思っています。理解できるよう醸成をした上で理解してもらい、または理解を前提に、具体的な絵は絵だが、裏に含まれる栄養剤はこの部分だと理解してもらえる様な別バージョンを用意する必要があると思っています。一本筋ではないかと思っています。しかし、仕上げとして表に提出するものは、「絵」で欲しいと考えています。これは倒れていないお願いとなりますので、実現のために是非ご協力頂きたいと思っています。

中村委員長：

スロー風土は、目的地の絵を描いたものではなく、人間を変えるための一つのきっかけだと思います。目的地はまだ分からない訳ですから、きっかけとしては非常に良いアイデアだと思っています。地産地消から新しい生活スタイルが出てくるだろうと思っています。終着点が分からなくても、きっかけの部分が形として説明できれば良いと思います。

横島委員：

そうですね。全ての提案がある種の町民インボルブメントの要素を持っている、役割を求めて具体的なタスクとしてある、という様な二重構造で進んでいかなければ、浅野先生が言われている様に今までの長期計画となら変わらないものになり、捨て駒になる可能性があると思います。逆に言うと、年次とともに我々が植えた樹木が成長するかもしれません。そのアドバンスも読み込んでおく必要があると思います。先生から欲張れる様なものを頂いておりますので、絵との落差はとれない方が良いのではないかと思います。

黒須委員：

身体を変えろと言う事で言いますと、観光客が自転車を利用する場合、単独で観光地を周るよりは、地域の人たちが健康のために設置されたコースを使って日常生活の中で自転車を利用する事で、観光客がコモンズに訪れた時に、道に迷わないように案内してもらえる等のシステムが出来れば良いと思います。例えば、現在はジョギングで流行っているのですが、朝 6 時半にホテル集合すると、先に走っているチームの方と一緒に走る事ができます。道に迷う事もなくジョギングする事ができ、町民と観光客の

交流の場にもなるシステムとなっています。軽井沢のサイクリストを育てていく仕掛けがあれば、ハードとソフト、インボルブメント、住民の健康、身体を変える事にも繋がっていくのではないかと思います。

中村委員長：

進士先生にも参加して頂いていた「古河総合公園」を作った時の経験ですが、コモンズで行う事とした最初のきっかけは、子育て中の奥さん達の行動で、乳母車をひいた奥さん達がいつの間にか集まって何か行っていました。自然発生的にグループが出来ていました。子育て中は孤立する傾向があるらしいのですが、公園等の場があり、集まる事ができれば友達ができるようです。子育てグループが最初のきっかけ論です。その後、子供が大きくなると、今度は田んぼを作ろうという様に発展します。やはり、この様に非常に小さなきっかけが必要なのだと思います。最終イメージではなく、きっかけ論だと思います。50年、100年先の最終イメージは分からないものです。一種の先駆けであると同時に、将来に出てくる種まきも必要だと思います。プランニングはある時点のものを描くものであり、文字や文章を仕組んで行う形はなかったと思いますが、その様な事も考えていくべきだと思います。

花里委員：

以前、雑談の中で、軽井沢を朗読の聖地にできたらというお話をしたと思いますが、そこに行ったら楽しい事ができ、そこで撮影した写真が思い出になるという何らかの聖地となる場所であると思います。

中村委員長：

面白いと思います。軽井沢で結婚式を行う方が年に何千人といるそうです。このようなことはプランニングには書かないものですが、我々の未来構想には記載して良いのかもしれませんが。現にある出来事に留意しておいても良いと思います。

藤巻委員：

年に5千組います。そのほとんどが教会で行われます。リゾートウェディングは、星野さんが始めたと言われています。

それまでの結婚式は家で行っていましたが、教会等の施設で行う様になり、それが都市からリゾートに引き継いだのだと思います。

安島委員：

中村先生が提示された100年未来構想は、私の想像を超えた素晴らしいものだと思います。現在のユートピアや田園都市を現代に描いたものなのではないかと感じながらお聞きさせて頂いておりました。

ランドデザインと未来構想に隙間がある話が出ていましたが、例えば、矢ヶ崎コモンズは大賀ホールを前提にしてデザインが考えられていますが、隙間を埋めるためには、もう少し音楽を中心として、地区をどうするかを検討する必要があると思います。そうすると、大賀ホールだけの活用ではなく、様々な施設等も具体的に出てくるのではないかと思います。音楽の好きな人が集うユートピアとして考えれば、また違う発想でビジョンが出てくるのではないかと思います。絵に落とす前にもう少し議論をする必要があるのではないかと感じました。

軽井沢の様々な施設を支えている大きなボリュームは観光客だと思います。やはり、軽井沢にあこがれを持って来ている人達によって軽井沢は成り立っていると思います。住民と別荘族の話は出てきていましたが、観光客をどうするかを検討する事が大事になると思います。

もう一つ、5つのエリア分けですが、雲場の池や別荘内の小道等のいわゆる軽井沢の一番軽井沢らし

い場所がエリアから落ちているはなぜかなという感じがします。軽井沢らしい場所を将来活かしていく意味でも、散歩する等の基本的な軽井沢らしさを味わえる場所がエリア設定から外れている事は気になります。

中村委員長：

軽井沢を持続的に発展させていくためには、「社会関係資本」が必要だと提案して頂きましたが、具体的な例や参考となるテキスト等がございますか？いわゆる観光客と地元の人との交流も社会交流資本となると思いますが、それを実践するためには何かインフラが必要になってくるのでしょうか？

安島委員：

ある種のビジョンを作成した上で具体的な事例を出す事は可能だと思います。先程、ジョギングでも例が出ていたと思います。

黒須委員：

出張にシューズを持参し、朝ジョギングする事がライフスタイルになっている方々は増えています。初めての街を走る時には、先程お話をさせて頂いた様な地元の人達と一緒に走れるシステムがあると、仲間も地域の情報も得る事が可能となります。社会関係資本が築かれているという事だと思います。

安島委員：

似た様な例ですが、箱根ではホテル単位でノルディックウォーキングを開催しており、資格をとって宿泊者を案内する仕組みができています。音楽関係は詳しく知らないのですが、軽井沢にもその様なまとまりが沢山あるのではないかと考えています。その様な人達を組織する事も考えられると思います。軽井沢には能楽堂もあるという話を聞いた事があります。東京で能を行っている人達が軽井沢に行くらしいです。

中村委員長：

アマチュアのグループですか？

安島委員：

アマチュアです。プロが使用する事もあるかと思っています。能の様なハイカルチャーが既に軽井沢にはあるという事が大事であり、その人達とのネットワークをとっていく必要があると思います。その様な人達は、こちら側から知らない（押さえていかないと）といけないと思います。私の知人でも、大賀ホールを借り、発表するために軽井沢に来たという人達もいます。

中村委員長：

現にその様な種は沢山あるという事ですね。地道にデータを集める必要があるかと思っています。

花里委員：

南原文化会の様に別荘族間のコミュニティもあるかと思っています。先程、安島先生から言われた外からのコミュニティもあると思います。コモンズはどちらをターゲットにしたものでしょうか？

中村委員長：

どちらかに限定するつもりはございません。いずれにしても、人材を見つけたり、声をかけたりするリーダーがいなければ結束はしていかないと思っています。どうマネジメントにするかにかかっています。生態系の事をやっているグループや祝祭の事をやっているグループ等、様々なグループやコミュニティがあって良いと思っています。クラブ組織なので関心がある事をして良いと思っています。過去の遺産があるわけですので、様々な事があるはずで、特定のものを排除する考え方は、今のところ考えていません。

横島委員：

部分的な繰り返しになりますが、今回これだけの先生方をお願いして多くの知見が出てきました。実際に受けてたつ町長と私では消化しきれない事もあります。これは凄いとっています。中村先生の内容で本一冊書けるのではないかというくらいに裏があります。その一方で、最初をお願いしている「ビジュアル化」の将来計画を作成するという今までになかったパターンをお願いしている事になりますと、どうしても、モデル的な表示、描出という形でしか対応方法がありません。どんなに文字で書いても町民は読みません。その読まない町民が手にとってもらえる様なものをつくる事が重要で、まずは目で見て興味を持ってくれる事、そして脇に書いてある説明を読んで内容を理解してもらおう、この様なパターンを考えております。意見を取り入れて欲しい事は理解できますが、それでは作業班がまとめる時に困ってしまいます。そうなりますと、逆に具体的な絵がピンボケしてしまう可能性もあります。どこをピックアップしても、必ず町民からは注文がくると思います。しかし、その事は勇気を出してディフューズし、我々はこの地区をモデルに全体を象徴的に表したいという事、エリアを限定してはいるが、地区の絵の中には深い意味があるという様な絵解きをして頂きたいと思えます。皆さんをお願いしたワーキングと作業班でのワーキングの違う側面をあえてピックアップしているという事です。ある意味、中村先生と小野寺さんが入れ込む内容で喧嘩をする事も想定しています。それでも何か出てくる事を期待しています。今日の議論を聞いていて、今の段階で皆様にもこの事についてはご理解頂きたいと思っています。欲張りすぎても良くないと考えています。余計なものを切った結果、最後に残ったエッセンスを表現したものが5枚のエリアデザインと全体のグランドデザインになる事を前提としてご理解頂き、ご協力頂きたいと思えます。

森山先生の質問ですが、ストリートファニチャーやストリートアートについてはどう感じていますか？

森山委員：

大阪万博以降に顕在化したデザインのエリアで、まさに中村先生と「銀座・京橋・日本橋の街路灯の国際コンペ」の審査をしましたが、まちづくりには比較的有効だと思います。安価で表情をつくるには、非常に有効だと思います。後は、建物と違って人に近いという事もあります。

横島委員：

経営母体、設置者はどこになりますか？

森山委員：

道路になりますので、道路管理者になります。

横島委員：

有難うございました。

藤巻委員：

先月、東北の被災地に行きました。軽井沢町は岩手県大槌町を特定として支援する事で進めています。その時に見たのですが、これから作られる町のイラストの看板が出ておりました。防災という観点から新しい街を再構築する絵でしたが、簡潔で非常に分かり易いと感じました。

事務局（小野寺）：

1枚の絵にした方が分かり易く、かつ伝わり易いという事であえて描いております。我々含めてチームでやっておりますが、8地区のイメージ図を描いております。

事務局（二井氏・幹事会委員）：

あの場合は、かなり細かい所をぼやかして描いております。あくまでも考え方を町民に伝える事がメインとなっております。

浅野委員：

全体像の表現の仕方についてお話がありましたが、そもそも中村先生がご提案している概念としてのコモンズを成立させるために、コモンズ同士をどう繋げるのか、繋げない方が良いのか等の基本的なスタンスを議論する必要があると思います。コミュニティとしてのコモンズを成立させるための前さばきとして町が事業をするべきなのか等の提案は当然必要になってくると思います。

中村委員長：

コモンズは一番重要な点についてまだ明確ではありません。私が考えている事は、地区全体をコモンズと言っているわけではなく、地区の中の中心としてコモンズがあるという考え方です。全体をコモンズとする考え方もあるかと思いますが、私はそこまで考えておりませんでした。それは、これからの問題になると思います。いずれにしても5つのコモンズは、それぞれ違ったテーマとし、多様性を持たせた方が良いと思っています。テーマのある部分が重なる等、連携については必要な時にその回路ができるのだと思います。地区間は近いですし、交通網もかなり密にありますので、連携は勿論あるかと思えます。使う人が両方に入る事もあるかと思えます。

進士委員：

横島さんのお話ですと絵にしなければならぬようですので、ダイレクトな話をします。地区エリアを四角に囲んで見せる事は良くないと思います。まず普通は外れた住民が怒ります。住民感情として当然だと思います。自然地形で線はできるべきであるが、そこを強引にクリアする事であるならば、少なくともグラデーションで境界をぼかす方が良いと思います。

今日はコモンズだけしか説明されませんでした。多分、タウンマネジメントや市民トラスト等ソフトやハードが色んな制度があると思います。安島さんが言われた観光の事もそうですが、地域資源は沢山あります。それをどう発展させ活用させるかについては、別途、対応しなければならぬと思います。それは住民にとっても、観光客にとっても必要で、多重某防御が必要だと思います。絵にしなければならぬのであれば、コモンズだけを打ち出す事は良くないと思います。本当は、先生の思想を勉強する塾でもやりながら、皆が参加して作っていく事が理想ですが、行政としてはそうはいかない。がっちとしたものが出来ないとするならば、理想を少し下げる事もあるかと思えます。そういった意味では多重防御をつくっておいてから、絵を出し、その補足説明で中村思想にいきつき、町民の意識変革につながる循環の構造をつくる必要があると思います。これは行政的にはなかなか難しいと思います。全体をコーディネートするまちづくり担当副町長みたいなものを設置し、思想を現実化する時に、口ばしを入れてやれば、行政という組織は動くと思います。今の様な縦割りの組織で行っている限り、この魂は揺れかねると思います。コモンズがある種の NPO としてテーマコミュニティをつくり、育て、支援したり、その活動拠点の空間（ボランティアハウスや集会施設）だけは適切に誘導型で配置する等、そのプログラムをしっかりと作らなければ、思想だけが高級すぎてという事になると思います。

中村委員長：

コモンズはセンターですから、メンバーはどこから来ても良いと思います。

進士委員：

しかし、結局、場所に張り付けてしまうと、定住者型になると思います。

中村委員長：

その様に見られる可能性はあると思います。

進士委員：

非日常の方は、コモンズとは違う概念で示してあげる必要があると思います。それが、市民トラストなのか、タウンマネジメントなのかは分かりませんが、多面的に仕掛けをつくっておかなければ、思想の実現は難しいと思います。

中村委員長：

今日はこれくらいにしたいと思います。有難うございました。

中村委員長：

次回第8回は、1月27日(月)にお時間を頂いております。内容に関してはこれから詰めてまいります。今の段階の話題では、町長および横島参与のプレゼンになっております。場所は風越のアイスパークの会議室となります。有難うございました。

(以上)